

公益財団法人

日韓文化交流基金

NEWS

2025.2.28 No.101

<https://www.jkcf.or.jp>



公益財団法人

日韓文化交流基金

THE JAPAN-KOREA CULTURAL FOUNDATION

Contents

- 4-5 **日韓国交正常化60周年プレ事業**
トークセッション「日韓×わたしたち」
- 6-11 **青少年交流事業紹介**
- ・ようこそ日本へ！ 訪日団の訪問先一覧
 - ・訪日団レポート「韓国ジャパンリポーター訪日団 第1団」
 - ・訪日団・訪韓団レポート 先端技術を学ぶ高校生の交流
 - ・訪韓団レポート01 大学生（2024.3月）、教員（2024.8月）
 - ・訪韓団レポート02 大学生（2024.9月）、高校生（2024.11月）
- 12-15 **交流の広がり**
- ・教育現場に生まれる新たな交流の試み
 - ・大学生訪韓団 団員による“情報発信”
 - ・アルムナイ活動が広がっています
- 16 **活動報告**
JKAF（Japan Korea Alumni Forum）訪韓団OBOG組織
新メンバー紹介、日韓交流おまつり in Tokyo ボランティア参加
- 17 **第24回日韓歴史家会議**
「描かれた歴史—表象の歴史学をめぐる」
- 18-19 **フェロー研究紹介**
- ・「境界」地域から見つけた持続可能性
金仙熙（建国大学アジアコンテンツ研究所 前任研究員）
 - ・日常生活のなかから「過去」を見つめる
佐藤雪絵（早稲田大学大学院政治学研究科 博士課程）
- 20-21 **助成事業紹介**
- ・在韓日本人女性施設ナザレ園のハルモニたちを記憶する写真展
 - ・パワーアッププロジェクト ～交流・体験・発信～ 琵琶湖編
 - ・青少年日韓音楽交流会 in 大邱
 - ・北東アジア学生ラウンドテーブル2024
 - ・第39回日韓学生会議 夏季東京交流大会
 - ・令和6年度日韓青少年対話型交流事業
- 22-27 **事業報告**



ホームステイ 涙のお別れ
(2024.6月 北海道 教員訪日団)



大学での交流
(2024.3月 ソウル 大学生訪韓団)



かつおのたたき作り体験
(2024.2月 高知 青年訪日団)



学校給食体験
(2024.8月 ソウル 教員訪韓団)



小学校訪問で児童にハングルを教える
(2024.6月 神奈川 教員訪日団)

日韓国交正常化60周年プレ事業

トークセッション「日韓×わたしたち」



日韓国交正常化60周年プレ事業として、9月6日、東京都港区の国際文化会館講堂にて、トークセッション「日韓×わたしたち」を開催しました。会場/オンラインのハイブリッドで、計82名が参加しました。

日韓の社会を見つめてきた一橋大学大学院法学研究科准教授 権容奭（クォン・ヨンソク）さん、韓国在住文化系ライター 成川彩（なりかわ・あや）さんに加え、それぞれ韓国と日本の大学に留学中の伊藤晃輝（いとう・こうき）さん、李叡琳（イ・エリム）さんがパネリストとして登壇しました。

第1部 パネリストの基調報告

権容奭（クォン・ヨンソク）さん、成川彩（なりかわ・あや）さんが、自らの経験や分析を交えながら文化交流を軸にこれまでの両国関係のあゆみを振り返り、今後を展望する報告を行いました。また、伊藤晃輝（いとう・こうき）さん、李叡琳（イ・エリム）さんは、韓国/日本との出会いや留学生活で感じたことなどをレポートしました。



権容奭 さん
(クォン・ヨンソク)

日韓文化交流の歴史と意義—「日韓文化遺産」と韓流インパクト

ポップカルチャーに代表される文化には相手国への認識を変えうる力がある。2000年前後から日韓両国で互いの国の文化に対する関心が高まってきた。いわゆる「韓流」・「日流」といった文化面での交流の深化に伴い、日韓の政治的関係と文化が切り離されて受け入れられるようになったといえる。

ドラマや映画などさまざまな分野で日韓のアーティスト、スポーツ選手同士はコラボレーションを行ってきた。このような日韓のコラボレーションを「日韓文化（ポップカルチャー）遺産」ととらえれば数多くの事例を挙げることができる。

日韓は互いに必要な存在であり、普遍的な価値を共有する関係にある。もっと互いの文化に触れあうことが今後も大事である。



成川 彩 さん

韓国における日本文化の受容

1998年、小渕恵三首相と金大中大統領の間で結ばれた「日韓共同宣言— 21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」の結果、韓国では段階的に日本の大衆文化が解放されていった。

韓国では日本の映画やアニメ、音楽などが人気を博してきたが、現在、日韓双方でこれまでにないほど互いの文化への関心が高まっているのではないかと。

日韓国交正常化60周年を迎えるが、過去には日韓の政治状況が文化交流に悪影響を与え、交流が停滞するようなこともあった。

過去にあったことに日韓双方で向き合うことが、文化交流、ひいては持続可能な関係のために大事なのではないかと。過去にきちんと向き合いながら、文化交流を続けるにはどうすればよいか、ぜひ皆さんの意見を伺いたい。



伊藤 晃輝 さん

「異端児」だけど大丈夫？

高校時代にK-POPをきっかけに独学で韓国語を学び始めたが、2019年に日韓文化交流基金主催の「JENESYS青少年訪韓団」に参加したことが人生の転機となった。「国交正常化以降最悪の日韓関係」と言われていた時期に韓国を訪れたわけだが、報道を通して見た韓国と、あたたかく迎え入れてくれた実際の韓国との乖離を実感したことが韓国留学を決意するきっかけとなった。友人や家族に反対され「異端児」扱いされたが、努力の末留学を果たし、現在、高麗大学政治外交学科で韓国政治を学んでいる。

韓国で暮らし、両国関係をみつめながら、日韓の文化がハイブリッド化していると感じている。未来世代の日韓関係はどうなるのか、皆さんと話し合いたい。



李 叡琳 さん
(イ・エリム)

日本と私 ―異文化体験と成長の物語―

叔母が結婚して日本で暮らしているため、子どものときから日本の存在を意識してきた。高校時代に、日韓の経済や経営の類似点・相違点に関心を持ち、留学を決意した。今は明治大学商学部で学んでいる。

学業以外にもアルバイトやサークル活動などで積極的に日本人と交流している。また、在日韓国人学生連合会に参加し、韓国人留学生同士のつながりも築いている。さまざまな活動を通じ、コミュニケーションの能力を向上させることができた。

大学卒業後は広告会社に就職する予定だが、今後も日本企業と韓国企業の橋渡し役、日韓の架け橋として活動していきたい。

第2部 トークセッション

4名のパネリストが、会場参加者/オンライン参加者から寄せられた質問に答える形で参加者との対話を深めました。

参加型トークセッションという初めての試みでしたが、特に若い世代の参加者からさまざまな意見が出され活発なやりとりが繰り広げられました。

「日韓両国で過去最大級の日本/韓国ブームが起こっている今、以前のように日韓関係が冷え込むことはもうないのか」、「日韓関係を持続するため若い世代ができることとしてどのようなことがあるか」などの質問が挙がり、今後の日韓関係に対する関心の高さがうかがえました。

パネリストがさらに意見を求めると、フロア参加の大学生たちから積極的に手が上がり、文化面から歴史問題にも話題が及んで、予定時間を多少オーバーしての幅広い議論の場となりました。

公式行事終了後に会場では自由懇談の時間を持ちましたが、パネリストと続けて議論する参加者たちの姿が見られました。また、日韓交流に関心の高い参加者同士が情報交換を行う結びつきの場ともなったようです。

参加者の感想紹介

- パネリストの皆さんの意見を聞き、新たな発見をすることができました。日韓が協力することによって様々な問題を解決していくことができると思いました。そのために、日本だけではなく韓国についてもより深く学んでいきたいと思っています。
- 文化を通じて節目の年にだけでなく、普段から互いの国を思い合えるような関係づくりができたらと思いました。そのために自分ができることなどを今一度考えてみたいと思いました。
- これまで15年ほどK-POPを通して韓国カルチャーに触れてはきましたが、K-POPの枠を超えて韓国について何か知ろうとしたことはありませんでした。若い頃は「エンタメと政治は全く別物。邪魔してくれるな」とさえ思っていて、自国の政治のことも自分には関係ないと思っていたからです。エンタメも政治も文化も歴史も全て地続きであるということのを再認識できました。今回のようなある種専門的なセッションは誰でも聞けるものではないと思います。本当に貴重で有意義な時間でした。

今回のイベントで出されたアイデアやご意見も踏まえ、日韓文化交流基金は2025年の国交正常化60周年に合わせてさまざまな行事を企画してまいります。

welcome to japan

ようこそ日本へ！

訪日団の訪問先一覧

※黒字の数字は人数

当基金の訪日プログラムは毎年、全国各地を訪問して、地域の特色について学んだり、また一般家庭でのホームステイを通じて、家庭生活を体験したりしています。

2024年1月からの1年余りで、全部で25の訪日団が29都道府県を訪問しました。

※2025年1～3月実施の事業含む（2024年12月現在の計画に基づく）

佐賀

24

1団体
高校生

35

福岡

23

4団体
高校生

115

熊本

26

3団体
高校生

131



長崎

25

1団体
高校生

35

広島

20

2団体
大学生

120



大阪

16

4団体

大学生・青年
高校生

161

130



岡山

19

1団体

大学生・青年

30

鹿児島

28

2団体
高校生

80



沖縄

29

1団体
大学生

30



高知

22

1団体
高校生

30



香川

21

1団体
大学生・青年

30

宮崎

27

1団体
高校生

66

和歌山

18

2団体

大学生
高校生

34

50



北海道 01

1団体
教員 34



宮城 03

2団体
大学生・青年 71



埼玉 04

3団体
大学生・青年 82
高校生 100



千葉 05

1団体
大学生 45

東京 06

12団体
教員 61
大学生・青年 298
高校生 271

青森 02

1団体
大学生 67



長野 13

2団体
教員 27
高校生 50



山梨 12

1団体
教員 27



愛知 15

4団体
教員 61
大学生・リポーター 10
高校生 50



神奈川 07

1団体
教員 34

新潟 08

1団体
高校生 61



富山 09

1団体
大学生・青年 10

石川 10

1団体
大学生・青年 121

岐阜 14

3団体
大学生・リポーター 131
高校生 50

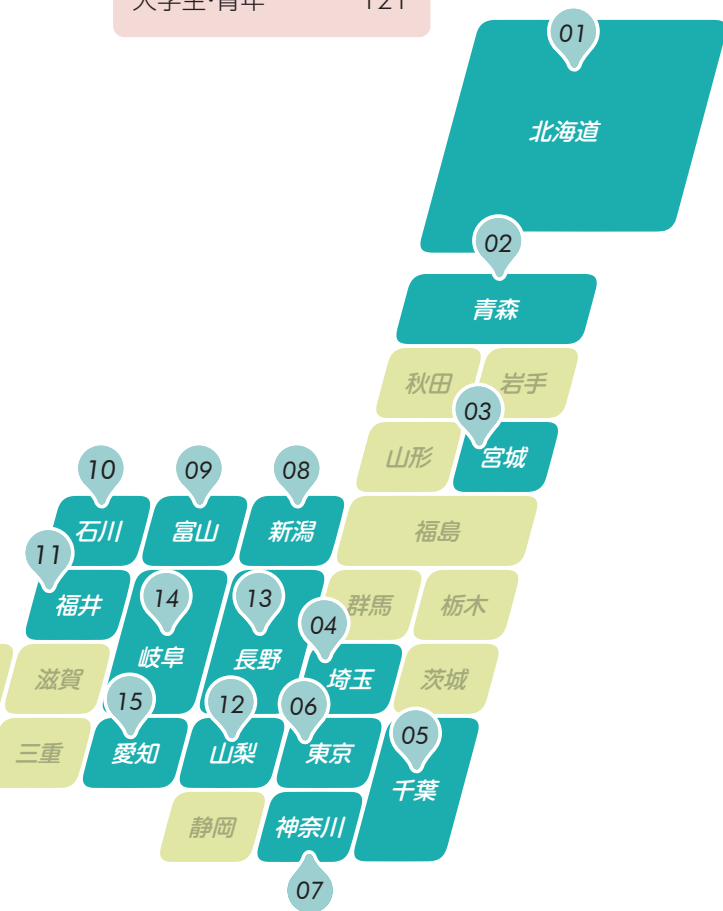


福井 11

1団体
大学生・青年 121

奈良 17

2団体
大学生 90
高校生 50



韓国ジャパンリポーター訪日団 第1団 (2024.7.9-17)

SNSで積極的に情報発信を行っている韓国の青年で構成された「韓国ジャパンリポーター訪日団」。韓国にまだ知られていない日本の魅力と、日韓共通の課題でもある地域活性化対策等について知ってもらい、それらをSNSで広く伝えてもらうことが今回のミッションです。

滞在2日目は終日、大学生訪韓団同窓組織アルムナイ(JKAF)のメンバーと交流しました。まず埼玉県日高市にある高麗神社を訪れ、境内の視察や茅の輪くぐり体験の後、第60代宮司(高麗文康さん)から高麗神社の歴史等についてお話を伺いました。午後は東京都内に戻り、新大久保へ。一行は日本での韓流の人気を実感するとともに、故李秀賢さん*の顕彰碑を訪れ、故人を偲びました。

*イ・スヒョンさん：2001年1月、東京の新大久保駅で線路に転落した人を助けようとして犠牲になった韓国人留学生。駅構内に顕彰碑が建てられている。

3日目からは宮城県へ移動。県庁表敬ではまず、宮城県の東日本大震災からの復興と伝承についての講義を受けました。

4日目と5日目は石巻専修大学の学生との交流や東日本大震災の被災と復興の様子を学ぶプログラムを体験し、その後、南三陸町と登米市で2泊3日のホームステイが始まりました。



ステイ先で団員たちは実に様々な体験をしました。首都圏から移住し、築135年の古民家を3年かけて改築した御夫妻宅では藍染体験のほか、隣接している清流で初めて

ホタルを見た感動。かつて皇室への献上米も生産した由緒ある米農家のお宅では家庭菜園でナスを収穫。シンガポールにも輸出するというトマト農家で頂いたトマトが、これまでで一番甘くて美味しかったと感激した団員の本業はシェフで、お礼に韓国料理を振る舞いました。この他、惣菜店を営む家庭で朝から弁当作りのお手伝いをしたり、岩手県の平泉まで出かけたりする等、たくさんの楽しい思い出ができました。

7日目は大阪への移動日。ホームステイ解散式ではあ

ちらちらで涙が見られ、中には南三陸からわざわざ仙台空港まで見送りに来てくださったご家族もいました。



大阪では東部にある布施商店街の「まちごとホテル」を視察しました。

「まちごとホテル」とは、商店街全体を一つのホテルに見立て、客室は改修した空き店舗、食事は地元の常連客が通うお店、そして銭湯を大浴場として利用し、各店舗を巡りながら地元の方々と交流して新たな魅力を発見していく新しい観光のスタイルであり、地域活性化にもつながる取り組みです。

概要説明の後、商店街内の「SEKAI HOTEL Fuse」に宿泊しつつ「まちごとホテル」を体験しました。

8日目は同ホテルを起点に、各店舗を巡りながら取材。朝食は地元の常連客で賑わう喫茶店のモーニングを食べ、その後は惣菜店や和菓子店、創業100年以上のベーカリー等でお勧めの品を取材したり、利用客にインタビューしたり、食べ物以外にも「お勧めの衣食住」というテーマで取材したりする等、団員たちはみな精力的に活動していました。

成果報告会では、「初めて訪れる場所、初めて知る取り組みばかりで新鮮だった。SNSに掲載する話題としても興味深い内容ばかりで良い経験となった」「東京では若者たちと、石巻では地元大学生と、ホームステイでは日本の一般家庭で、そして大阪では商店街の方々といったように、様々な地域や年齢層の方々との交流を通じて日本人の考え方や習慣、文化に触れることができ、たくさんのことを学んだ」等の感想が聞かれました。



2024年度の高校生交流においては、これまでのプログラムに加えて、実業系・技術系高校でロボット工学等の先端技術を学ぶ高校生同士の交流が始まりました。

<訪日プログラム>

9月に行われた訪日プログラムでは、ソウルロボット高等学校と、水原ハitek高等学校の生徒・引率計50名が来日しました。この2校は韓国が産業人材育成のために力を入れている「マイスター高等学校」に認定されており、多くの卒業生がそれぞれの専門と関連する企業に就職しているそうです。

都内ではオリエンテーションや講義のほか、日本科学未来館で日本の最先端の技術に触れ、防災体験施設の「そなエリア」では、地震の多い日本ならではの防災の知識や技術について学びました。



鹿児島情報高校にて（授業体験）

メインの日程は鹿児島県への訪問。鹿児島情報高等学校では同じ技術系のコースで学ぶ高校生と交流しました。身振り手振りを交えながら、互いに学校で学んでいる内容を伝えようとする一生懸命な姿が、教室や実習室のいたるところで見られました。鹿児島ではこのほか、

県庁を表敬して鹿児島の魅力や韓国との関係について説明を受け、その後、鹿児島市立科学館では、活火山である桜島のメカニズムについて学びました。また、日置市の沈壽官窯を訪問し、第15代沈壽官さんから沈壽官窯の歴史や、伝統を受け継ぐご自身の思い等について、貴重なお話を伺いました。



バディと一緒に
（鹿児島情報高校にて）

<訪韓プログラム>

11月の訪韓プログラムでは、鹿児島情報高校の生徒等で構成された50名がソウルロボット高等学校と水原ハitek高校を訪れ、生徒たちは再会を喜びとともに、韓国の高校生活を体験しました。

水原ハitek高校では精密機械科、自動化システム科、電気電子制御科の3つのコースの授業を順々に体験しました。電気電子制御科では「ウソ発見器」作りに挑戦し、生徒たちは自身の作品を記念として頂きました。



「ウソ発見器」作りを体験（水原ハitek高校）

またソウルロボット高校では協働ロボットの基本実習やプログラミングなど、5つのグループ

に分かれて授業体験を行いました。ドローン組み立て及び飛行実習のグループは、バディと共に組み立てたドローンを用いて障害物通過の実習にチャレンジ。悪戦苦闘しつつも無事成功し、ドローンを記念に頂きました。



組み立てたドローンで障害物通過にチャレンジ（ソウルロボット高校）

一行はこのほか、現代モータースタジオ高陽や国立果川科学館で最先端技術について学んだり、民俗村とワールドK-POPセンターを訪問して伝統と最新の大衆文化の両方に触れたりする等、盛りだくさんの7日間を過ごしました。

実業系・技術系の高校に通う生徒たちの交流事業は今後も続く予定で、この事業をきっかけに両国の実業系・技術系の高校同士の交流が少しずつ広がっていくよう、当基金も取り組んでまいりたいと思います。



給食体験（韓国の生徒は薬味でスープが真っ赤に：ソウルロボット高校）

大学生訪韓団（1・2団）（2024.3.10-16）

50名の大学生たちからなる訪韓団の今回のテーマは「日韓交流と韓国の現状理解」。ソウル特別市から京畿道城南市・高陽市・坡州市、慶尚北道慶州市、釜山広域市と、北部から南部へと縦断していく中で、多角的に韓国を知るためのさまざまなプログラムを体験しました。

ソウルにある東国大学とKAC韓国芸術院の訪問では、同世代の若者と交流。東国大では団員が各自準備した資料を使って日本の魅力を紹介しながら対話を深めました。KAC韓国芸術院では同校の在学生からK-POPダンスの手ほどきを受け、一緒に踊りながら交流しました。



このほか特に印象に残ったとの感想が多かったのは、DMZ（非武装地帯）視察。一般的な旅行ではなかなか訪問が難しい場所でもあり、団員たちは軍事目的で掘られたという第3トンネルや北朝鮮の領土まで見渡せる都羅展望台を実際に訪問したことで朝鮮半島が分断国家であることを実感したようです。戦争や平和についてあらためて考えるきっかけとなったという感想も聞かれました。



帰国前日の成果報告会では、今回の経験を踏まえた各自のアクションプランを発表しました。また、今回の経験を「フォトダイアリー」にまとめて発表したり、地元の新聞社に訪韓団参加の所感を寄稿したりして、訪韓団の成果をできるだけ多くの人に知ってもらおうとする動きも出てくる等、団員たちはそれぞれの立ち位置から取り組んでいます。

日韓学術文化交流事業訪韓団（2024.8.18-24）

「韓国の教育、歴史及び文化全般に対する理解」をテーマに、日本の小中高及び特別支援学校の若手教員等49名が、8/18～24まで6泊7日の日程でソウル特別市及び京畿道を訪問しました。

最初に「韓国の教育制度と現状」に関する講義を通じて韓国の教育事情について知識を深めた後、メインプログラムの学校視察では、ソウル市内で吉元（キルウォン）小学校と培花（ペファ）女子高等学校を訪問し、生徒や教職員の皆さんと交流しました。



韓国の児童・生徒に日本に対する興味や関心を高めてもらえるよう、模擬授業では日本語や日本の文化について、また進路教育や「世界市民としての教育」等について紹介しました。いずれの学校でも、児童・生徒たちは興味深そうな表情で話に聞き入っていました。

今回の訪韓はこの他、日韓の文化的差異等に関する講義の聴講や、統一展望台の視察、各種の伝統文化体験といったプログラムを通じて、韓国についてはもちろん、日本との関係や朝鮮半島全般を取り巻く現状について幅広い知見を得る機会となりました。

大学生訪韓団

(日本国外務省・大韓民国外交部主催 相互派遣事業)
(2024.9.20-28)

「日韓国交正常化60周年へ向けて～未来を夢見る相互交流～」をテーマに、日韓両国の外交当局による相互派遣形式の訪韓団が9日間の日程でソウル特別市、京畿道、江原特別自治道を訪問しました。

滞在3日目はソウル市内で開催された「日韓交流おまつり in Seoul」で、「日本の折り染め体験」と「災害が起こった際の被災者の知恵紹介」の2つのブース運営を行いました。*

※27ページで当日の様子をご紹介します。

日程後半には烏頭山展望台や龍山戦争記念館を訪問し、韓国の歴史の一面と分断国家の現状について学びました。一行は烏頭山展望台では北朝鮮との近さに驚き、龍山戦争記念館では朝鮮戦争について詳しい解説を受ける中で質問が途切れることなく続いていました。



2024 한일대학생교류
ソウル大学での学生交流
서울대학교 학생교류

高校生訪韓団 (2024.11.3-9)

和歌山県と長野県の複数の学校から選抜された高校生訪韓団の一行100名（和歌山県、長野県より各50名；団長・引率含む）が、ソウル特別市と京畿道を訪問しました。

滞在中のメイン行事である学校訪問では、一行が韓国観光高等学校、韓国アニメーション高等学校、突馬（トルマ）高等学校の3校を分かれて訪問し、それぞれの学校の特色を生かした交流プログラムを体験しました。

観光高校では伝統文化体験のほか、ホテルスタッフのサービス実務を体験、アニメーション高校では日韓高校生の混合グループごとにChatGPTを使って台本を作成する、AIを駆使した映像制作の授業に参加しました。また、突馬高校では科学分野の授業をパートナー生徒と一緒に受講しながら交流しました。各校ではパートナーとなる生徒が団員一人一人に付いて案内をしながら、身振り手振りで一生懸命意思疎通を図ろうとする姿がとても印象的でした。



他にもソウル市内にある東国（トングク）大学を訪問し、日本学科の教授による「日韓文化コンテンツ産業の現状と未来」という講義を聴講した後、日本語を学ぶ大学生たちと交流しました。学生たちの流暢な日本語と、日本に関する知識の深さに高校生たちは驚きつつ、あちらこちらで話に花が咲いていました。



交流の広がり ー教育現場に生まれる新たな交流の試みー

当基金の「日韓学術文化交流事業」(小・中・高・特別支援学校に勤務する若手教員を対象とした訪韓団・訪日団)に参加した団員の方々による、新たな交流の輪が広がっています。

大分県立大分情報科学高等学校・ソウル工業高等学校 姉妹校に

(2024年1月)

2022年度実施の「日韓教員オンライン交流」で出会った、ソウル工業高校の禹仁重(ウ・インジュン)先生と大分情報科学高校の宮脇滉平先生が[※]、互いのクラス同士のオンライン交流をスタート。その後2023年度に再開した教員交流プログラムで初めて対面し、さらに交流を続ける中で生徒の相互訪問が実現。2023年12月に大分情報科学高がソウルを、2024年1月にはソウル工高が大分をそれぞれ訪問して交流し、ソウル工高一行の訪日時に、姉妹校提携の締結式が執り行われました。

※勤務校はともに当時



日本の中学校教員が韓国の小学校で模擬授業

(2024年5月)

2023年度の教員訪韓団に参加した檜原村立檜原中学校(東京都)の青木奈央先生が、訪韓団で出会った韓国の教員とのつながりで、ボラメ小学校(ソウル特別市)の薛允卿(ソル・ユンギョン)先生に出会い、同小で日本文化紹介を中心とした模擬授業が実現。中学校の先生が小学校で交流をするというユニークな取り組みとなりました。



関西創価中学校(大阪府)と 報徳(ポドク)中学校(忠清北道報恩郡)

(2023年11月～)

2023年の教員訪日団に参加した李文鎬(イ・ムンホ)先生が帰国後、同年の教員訪韓団と交流した際に出会った中嶋奈々世先生と教え子同士の交流について意気投合してスタート。これまでポエム展示会、ペンパル交流等を実施し、2024年11月には報徳中の生徒が関西創価中を訪問する等、交流が続いています。



白岡市立南小学校と韓国の小学校3校との交流

(九月西小学校・豊湖小学校・梨洞小学校)

教員訪韓団に参加した白岡市立南小学校（埼玉県）の秋葉慧子先生より、交流相手となる小学校を探しているとの相談を受け、当基金より教員訪日団に参加された韓国の先生方に呼び掛けたところ、2024年1月には九月西（クウォルソ）小学校（仁川広域市）の6年生クラスと、また豊湖（プンホ）小学校（慶尚南道昌原市）の4年生クラスとのオンライン交流が実現しました。その後9月には梨洞（イドン）小学校（慶尚北道浦項市）の5年生クラスとのオンライン交流も実施しました。



このうち豊湖小との交流は、当基金の教員交流事業に参加した日韓双方の教員が同僚に声を掛け、両校の5年生全4クラスによるクラス別交流が実現したもので、教員交流の輪が自然発生的に広がりを見せた事例となりました。

いずれの交流も、学校紹介や1日の過ごし方、住んでいる地域についてそれぞれ紹介したり、質問タイムを通じて興味のあることについて教え合ったりしました。児童たちは、当日はもちろんのこと、交流の準備を通じて韓国への関心を高め、それまで知らなかった韓国に関する様々な知識を身につけながら、交流後は相手の国について話してくれることが多かったそうです。

先生方も、双方にとって都合の良いスケジュールを考えたり、意思疎通をうまく行うための工夫を凝らしたりと、苦労した点がたくさんあったそうですが、児童たちの喜ぶ姿が見られ、また校長先生や同僚の先生方の協力を得て実現にこぎつけたという貴重な経験が得られたことで、大変有意義な取り組みになったと述べておられました。

置戸町立置戸小学校（北海道常呂郡）と 智産（チサン）小学校（全羅南道珍島郡）

2022年11月の「日韓教員オンライン交流」で出会った金性守（キム・ソンス）先生と太田愛先生が、学校間のオンライン交流を計画。翌月には初めてのオンライン交流授業を実施しました。2023年は11月と12月に計2回の交流を実施。互いの伝統遊びや食べ物を紹介したり、スポーツをお題にしたジェスチャーゲームをしたりして大いに盛り上がりました。交流の終了時には、双方の児童たちが画面越しに名残を惜しむ姿が見られました。

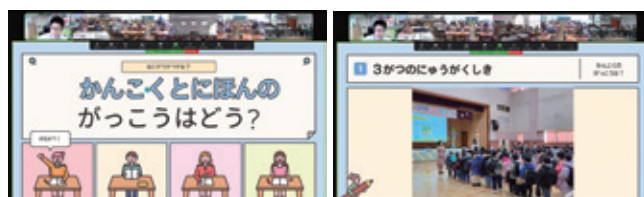


川崎市立平間小学校（神奈川県）と 慶雲（キョンウン）小学校（慶尚南道金海市）

2024年6月の教員訪日団に参加した董乃化（トン・ネファ）先生は、平間小の加地盛一郎先生が担任する4年生のクラスで模擬事業を実施。先生、児童たちと親交を深め、帰国後に自身が担任する慶雲小の4年生のクラスと加地先生のクラスの児童同士のオンライン交流が実現しました。児童たちは、手紙のやり取りや、歌や器楽演奏の披露を通じて交流しました。



福岡市立鳥飼小学校（福岡県）と ハンウル小学校（京畿道華城市）



平間小と慶雲小の交流の話を伝え聞いた、鳥飼小の原田恵里先生とハンウル小の厳俊奕（オム・ジュンヒョク）先生（共に2024年度の教員訪韓団・訪日団参加者）が意気投合し、オンライン模擬授業を計画。オンラインでも「一緒に過ごしている」という感覚を持てるよう、写真や動画を効果的に用いつつ、また折り紙で共に手を動かす時間を組み込む等、工夫を凝らした交流を行いました。



掲載分以外の写真や、担当された先生へのインタビュー記事は当基金ウェブサイトで紹介しています。

交流の広がり — 大学生訪韓団 団員による“情報発信” —

訪韓期間中の様子をSNSで紹介したり、帰国後、大学の講義時間に成果を発表したりする等、訪韓団に参加した学生たちは積極的な“情報発信”に取り組んでいます。

(2次元コードを読み取ると、それぞれのサイトをご覧になれます)

インスタグラムを通じて、期間中の体験の紹介や、大学生訪韓団についてのメッセージを発信しています



＜地元の新聞に体験を寄稿＞

富山大学人文学部 亀田芽生さん
「韓国訪れ 友好築く学び多く」(2024.4.12 山陰中央新報「こだま」欄)
「訪韓で学び 過去の教訓を未来へ」(2024.4.13 朝日新聞「声」欄)

交流の広がり —アルムナイ活動が広がっています—

大学生訪日団・訪韓団参加経験者（アルムナイ）のみなさんによる様々な活動がつながり、交流の輪が広がっています。

「KJAFB」発足

(2024年3月)

2024年3月に釜山で開催されたJENESYS参加経験者の同窓会で、「KJAFB (Korea-Japan Alumni Forum in Busan)」の発足が発表され、当基金の鹿取克章理事長より初代会長の陸泰亨(ユク・テヒョン)さんに任命状が授与されました。陸会長はあいさつで「私たちは今、グローバル化の時代に生きています。この同窓会も時代の波に乗って、日韓関係改善の先頭に立ち、良い影響を与える団体になるよう努めていきたいです」と決意を新たにしていました。

KJAFBは現在、JKAF (Japan-Korea Alumni Forum 訪韓団参加経験者対象)とKJAF (Korea-Japan Alumni Forum ソウル地域から参加した訪日団参加経験者対象)に続く3つ目のアルムナイ組織として活動しています。



日韓次世代会議 開催(オンライン) (2024年1月)

2022年度に続き2回目の開催。参加者はそれぞれソウル・東京の会議室に集まり、オンラインも含めて16名が参加。日韓が共通して抱える課題である「若者の政治参加」「少子高齢化」「環境、災害、エネルギー」等、合計7つのテーマについて活発な意見交換が行われました。



JKAF同窓会(オンライン) (2024年5月)

(2024年5月)

2024年3月実施の大学生訪韓団の成果報告会(於：東京)に、同年1・2月実施の韓国青年訪日団メンバーもオンラインで参加。東京・ソウル・釜山の各会場を結び、訪韓団・訪日団でそれぞれ学んだことを発表し合う等しました。日本全国から集まった訪韓団参加経験者との交流や、新たに発足したKJAFBの紹介も行われ、日韓双方の同窓組織が繋がる機会となりました。



新しいアルムナイが増えていくにつれ、新旧のアルムナイ間の交流も広がっています。当基金ではアルムナイのみなさんの訪日団／訪韓団の経験を生かした活動をバックアップしてまいります。



JKAF (Japan Korea Alumni Forum) 訪韓団OBOG組織

JKAF新メンバー紹介 (インタビュー：JKAF実行委員)

新井 麻愛彩 (東京学芸大学教育学部2年)

JKAFは2024年、新しい門出を迎え、8人のメンバーが加わって計14名となりました。6月に開かれたキックオフミーティングで新たに選出された、代表・副代表へのインタビューを紹介します。

※学年はいずれも2024年度

Q1 JKAFへ入った理由 Q2 韓国の好きなのところ Q3 訪韓時の印象に残ったエピソード Q4 意気込み

新代表 間蔵 裕亮 さん (静岡県立大学4年)

- Q1 大学生訪韓団を通して得た、様々な出会いや経験が今の自分にとって非常に大きな財産となりました。もっと多くの人に自分たちの活動を知ってもらいたいと思い、加入しました。
- Q2 K-POPや韓国ドラマなどのエンターテインメントが好きです！他にも、訪韓をきっかけに文化や歴史にも興味を持っています。
- Q3 DMZ (韓国と北朝鮮の軍事境界線) でトレッキングをしたことです。私たち日本人にとって具体的なイメージが乏しい北朝鮮を近い距離で感じることができ、緊張感を持ちつつも楽しむことができました！
- Q4 不慣れではありますが、一生懸命頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします！

新副代表 古田 舞 さん (名古屋工業大学4年)

- Q1 大学生訪韓団を通じて得た、韓国に対する興味や繋がりを維持したいと考えたからです。
- Q2 やはり食事です。韓国料理は栄養バランスよく食べられる食事が多く、美味しい上にカロリー等を気にせずに食べられるので大好きです！
- Q3 広安里での自由時間に、訪韓前に日本で交流した訪日団の学生たちが私たちに会いにきてくれたことです。わざわざ時間を割いて会いにきてくれたことが本当に嬉しかったです。
- Q4 日韓の大学生が互いについて、より興味・関心を持てるような場を提供することができるよう頑張ります！

韓国が大好きな間蔵さんと古田さん。そんなおふたりを中心に志高いメンバーで新生JKAFは走り出しています。

日韓交流おまつり in Tokyo ボランティア参加

JKAF実行委員 星川 真砂 (神戸大学文学部2年)

2024年9月28日・29日に開催された「日韓交流おまつり in Tokyo」の日韓文化交流基金ブースでボランティアとして活動しました。ブースでは「韓国の若者と話そう」および「高句麗古代装束着用体験」コーナーの運営を行い、多くの方にお越しいただきました。

「韓国の若者と話そう」コーナーでは、呼び込みや司会進行などの役割を担いました。来場者の方々と、訪日団団員として来日した韓国の若者が、韓国ドラマやアイドル、お互いの国に興味を持ったきっかけ等、様々なトピックについて語りあったのですが、会場は終始和気あいあいとした雰囲気に包まれていました。来場者の方々に書いていただいた感想には、日韓両方の言語で「楽しかった」「いい経験ができた」等といった好意的な反応が多く見られ、非常に嬉しく思いました。

「高句麗古代装束着用体験」では着付けのお手伝いと呼び込みを行いました。幅広い年代、国籍の方が美しい古代衣装を身にまとい、鮮やかに変身し、楽しそうに写真を撮っておられました。

また、ボランティアを通じて韓国の同世代の若者たちとも親睦を深めることができました。今回来日した訪日団員の多くは日本語を話していましたが、その流暢さに驚くとともに、自分も韓国語の勉強に励まなければ、思いを新たにしました。

2日間という短い期間でしたが、非常に刺激的な経験であり、今後とも日韓交流の一助となれるよう努めていきたいと感じました。



2日間のおまつり運営を終えて



「韓国の若者と話そう」コーナーの参加者の皆さんからのあたたかいメッセージ



JKAFインスタグラムもぜひご覧ください

第24回日韓歴史家会議

日韓両国の歴史家34名の参加による、第24回日韓歴史家会議が2024年11月16、17日の2日間、都内にて開催されました(会場・オンライン同時開催)。

この会議は、日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」を設けることを目的として、2001年の第1回以来、日本史、韓国史のみならず、ヨーロッパ史、経済史など多様な分野を専門とする両国の歴史研究者が集い、最新の研究成果の報告と意見交換を行っています。

今回は、近年の歴史学の中で注目を集めているテーマの一つである「表象」に焦点をあて、「絵画や文学などに描かれた歴史」、「大衆娯楽の示す社会のあり方」、「『正史』に見る歴史像」と題する3つのセッション別に日韓双方からの報告とこれに対する討論が行われました。

講演会の内容を含む今回の会議の報告書は、2025年3月末までに当基金ウェブサイト上で公開する予定です。



第24回日韓歴史家会議 「描かれた歴史 — 表象の歴史学をめぐる」

■会議日程

◆11月16日(土)

◇第1セッション「絵画や文学などに描かれた歴史」

司会：飯島渉(長崎大)

報告：日本側／ルーヴル美術館開館時における「王政のしるし」の展示
田中佳(徳島大)
韓国側／アドルフ・メンツェルの歴史画に表れるプロイセンのイメージ：視覚史(visual history)研究の方法論的難題に関する探究
全鎮晟(チョン・ジンソン 釜山教育大)
討論：韓国側／金俾儒(キム・ハンギョル 全南大)
日本側／三井麻央(京都芸術大)

◇第2セッション「大衆娯楽の示す社会のあり方」

司会：小田中直樹(東北大)

報告：日本側／歴史を描いた学習マンガの社会的受容とその叙述表現
渡辺賢一郎(中央大)
韓国側／カリカチュア、表象及び近代性：帝国日本漫画の作動方式と見方
韓程善(ハン・ジョンソン 高麗大)
討論：韓国側／崔溶讃(チェ・ヨンチャン 亜洲大)
日本側／中根隆行(愛媛大)

◇第3セッション「『正史』に見る歴史像」

司会：伊藤俊介(福島大)

報告：日本側／近代日本における「正史」の構想とその挫折
長谷川亮一(立教大)
韓国側／前近代における韓国人の自国史編纂と歴史認識
盧官汎(ノ・グァンボム ソウル大)
討論：韓国側／沈熙燦(シム・ヒチャン 延世大)
日本側／植田喜兵成智(早稲田大)

◇日韓歴史家会議開催記念講演会「歴史家の誕生」

日本側／熱帯と近代世界経済—インド経済史とグローバル・ヒストリーの問
協村孝平(大阪経済法科大客員教授)
韓国側／韓国で日本史を研究するという：輸出銅の調達をめぐる幕藩関係の研究からデジタル歴史学まで
尹炳男(ユン・ビョンナム 西江大名誉教授)

◆11月17日(日)

◇【第4セッション 総合討論】

司会：小田中直樹(東北大)、伊藤俊介(福島大)

■参加者名簿

(日本側) *敬称略、五十音順

飯島渉	長崎大学	医療社会史
伊藤俊介	福島大学	朝鮮近代史、近代日朝関係史
植田喜兵成智	早稲田大学	朝鮮史
小田中直樹	東北大学	フランス社会経済史、歴史関連諸科学
木畑洋一	東京大学/成城大学	国際関係史
久保亨	信州大学	中国近現代史
田中佳	徳島大学	フランス文化史、西洋美術史
田野大輔	甲南大学	歴史社会学、ドイツ現代史、ナチズム研究
中根隆行	愛媛大学	日本近現代文学、比較文化研究
芳賀満	東北大学	ユーラシア大陸考古学、高等教育論
長谷川亮一	立教大学	日本近現代史
三ツ井崇	東京大学	東アジア史
三井麻央	京都芸術大学	美術史、ドイツ近代美術史
宮嶋博史	成均館大学	朝鮮史
協村孝平	大阪経済法科大学	インド社会経済史、グローバル・ヒストリー
渡辺賢一郎	中央大学	ヨーロッパ史、マンガ論

(韓国側) *敬称略、カナダラ順

金旻	ソウル大学	日本近代史
金俾儒	全南大学	西洋近代史
盧官汎	ソウル大学	韓国近現代史
都珍淳	昌原大学	韓国近現代史
朴薫	ソウル大学	日本近代史
裴京漢	新羅大学	中国近代史
沈熙燦	延世大学	韓日近代思想史
尹炳男	西江大学	日本近世史
尹裕淑	東北亜歴史財団	日本近世史
李炯俐	ソウル大学	韓国近代史
林炳徹	韓国教員大学	西洋近代史
全鎮晟	釜山教育大学	ドイツ近現代史
曹永憲	高麗大学	中国近世史
崔溶讃	亜洲大学	西洋現代史
韓程善	高麗大学	日本近現代史
咸藝在	梨花女子大学	日本近代史
洪聖根	東北亜歴史財団	国際法
洪宗郁	ソウル大学	韓国近現代史

「境界」 地域から見つけた持続可能性

金仙熙 (キム・ソンヒ)

東京経由で青森へ向かうことになったが、出発からいい予感がしたのは見知らぬ人の優しさのお陰だった。茅場町駅でエレベーターが見つからず、重い荷物を抱えて必死に階段を上っていた時、「お手伝いしましょうか」と爽やかな女性の声が聞こえた。これ以上ない絶妙のタイミング。「ありがとうございます」以上の感謝の気持ちで、「自分も同じくこの優しさを他の人にお返しします」と言った。善なる影響力かな、青森での初めての調査も何だかうまくいく気がした。



JR五能線の木造駅のデザインは遮光器土偶

調査対象を青森にした理由はいくつかある。まず「境界地」としての魅力。境界地は中央に対して辺鄙^{へんぴ}で受動的な存在と思われがちだったが、実は異文化の交錯、文化交流の側面からは極めて能動的な空間である。地域活性化においても文化の多様性と交流の歴史を活かし、新たな活力を生み出す力がある。地域衰退の問題は大きな課題で存続すら危うい所もある。北海道・本州の境界に位置する青森も少子高齢化や都市転出で人口減少が進んでおり問題山積だが、いかにしてその危機を克服しているか、今回の調査は歴史遺産の活用状況や地域交通、とりわけ鉄道に焦点を当てた。

青森を代表する歴史遺産の三内丸山遺跡はそれ自体歴史的価値が高いが、それだけではない。青森大学の学生による「ぬい撮り倶楽部」は大平山元遺跡を素材に地域の小学生の協力を得て「縫いぐるみ」と写真を結びつけ、またSNSも活用してPRする。子供の遊び感覚のような活動が地域問題の好循環を生み出していることは非常に興味深い。

また過去において近代化を担ってきた鉄道と地域とのかかわりを知るにも青森は最適地である。過疎地域における交通問題として津軽線の事例は示唆に富む。2年前の豪雨災害で一部区間が運休止、その区間はそのまま廃線となった。今回、外ヶ浜町・今別町、JR東日本と多くの方々の声を直接聞き、メディアの報道だけでは知りえない、鉄道の存廃をめぐる深い事情が分

かった。「経営悪化による廃線」は容易だが、困難であっても鉄道の存続・活用・変容と地域住民の生活・観光まで多角的に考える必要がある。また全国にファンの多い五所川原の津軽鉄道や、大文豪太宰治の足跡が残る大鰐まで通じる弘南鉄道も赤字で廃線の不安があるが、これらの列車はどこかノスタルジックな「原風景」をいだいている。東京という中心から遠く離れている境界地だからこそ守られた、日本らしい風景である。

また調査日程が詰まっていたが忙中閑ということとで、この世とあの世の接点と言われる霊場恐山を訪問し、悲しくも美しい光景に深く惹かれた。生まれたモノはすべて消滅する。だからこそ精一杯生きていくのだよと地藏菩薩の声が聞こえるようだった。地域の問題も同じではないか。衰退を空しく傍観するより、せめて次の世代にだけでもバトンタッチできるよう、頑張ることが真の「地域活性化」であろう。それが1か月半、青森で教わったことである。寒さで有名な青森は異邦人にとっても暖かかった。中泊町では独りで食事をしていると声をかけられ、その後十三湖や岩木神社などの景勝地や地域性豊かな道の駅を案内してくださった方もいた。地域や地域民への深い愛情を寄せる青森大学の先生方や地元の方々とのご縁は、今後も青森を訪れる第一の理由となるだろう。



弘南鉄道大鰐線の金魚ねぶた列車

付記：本内容は青森大学附属総合研究所の『総研だより』第6巻第2号（2024.9.30）掲載の内容を改稿して供した。



金仙熙 (キム・ソンヒ)

建国大学アジアコンテンツ研究所前任研究員・
青森大学附属総合研究所客員研究員

専門は日本思想史・日韓比較文化。韓国学中央研究院研究員、高麗大学日本研究センターHK研究教授を経て現職。共著に『東北アジアの近代体験と文化空間』、訳著に『大韓帝国・植民地朝鮮の鉄道旅行案内』（統監府他）、『日本政治思想史17～19世紀』（渡辺浩）など。

日常生活のなかから「過去」を見つめる

佐藤 雪絵

私たちは、「過去」の人権侵害に、いま、いかに向き合うことができるのか。こうした問題は、韓国では「過去清算」という概念を用いて議論されてきた。私は現在、この「過去清算」の政治思想史を主題に博士論文を執筆している。当初は1980年代の学生・在野運動に着目して研究を進めてきたが、女性運動にも目を配る必要があることを自覚するようになり、追加で史料調査や聞き取り調査を実施する必要性が生じた。幸いにも、「1980年代韓国女性運動における『過去清算』の政治思想史」を主題に訪韓フェローに採用され、2024年5月から9月までを、ソウル大学日本研究所で過ごすことができた。

博士論文の執筆を進めるにつれ、ある悩みが急速に大きくなっていった。それは、韓国の政治思想史を研究していながら、私は、韓国の人々が生きてきた社会や、その心の機微をあまりにも知らないのではないか、という悩みであった。韓国での長期滞在の経験は、12年前に交換留学生として1年間学んだことがすべてだった。それも、当時の私は言語さえ習得すればよいと思い込み、韓国社会を十分に観察できなかった。そこで、日常生活のなかで1980年代の韓国社会への想像力を働かせるとともに、韓国の人々の心のひだを理解することを第二の目標に、今回の韓国滞在に臨んだ。



かつて学生が警察と対峙した正門

当初、滞在中には、1980年代の韓国女性運動が「過去清算」の政治思想に与えた影響を解明しようとしていた。だが、研究の進展につれ、研究対象は、女性運動と学生・在野運動の関係などへと自然と広がった。滞在中には、ソウル大学中央図書館や国立国会図書館、国立中央図書館や外交史料館などで機動的に史料調査を実施できたこともあり、大きな成果があげられた。

こうした研究の広がりや、ソウル大学で日常生活を送ったことで実現したものでもあった。学生が警察と対峙した正門、壁新聞が貼られた掲示板、大勢の学生が集会やデモを行ったアクロポリス広場、対外交渉の場にもなった学生会館など、かつての民主化運動の現場そのものに身をおくことで、タイムスリップしたかのように、史料で読んできた情景を追体験できた。街中の自宅近くにあるバス停には、そこで焼身自殺したソウル大生を記念したレリーフが埋め込まれ、人々はこれといった関心を示さずに踏み越えていった。忘れ去られつつある、街に出た学生たちの姿やその声が、目に、耳に、生々しく浮かんできた。



常連になった新源市場のようす

研究とは一見直結しないような日常生活も重要であった。常連になった市場の「サジャンニム」(店主)たちや住まいの管理人さんとの何気ないおしゃべり、毎日乗るバスで顔なじみとなった運転手さんとの挨拶、学食での日替わりの昼食、バスの車窓から眺める日々変わりゆく風景など、日常生活のシーンひとつひとつが、〈韓国研究〉の貴重な積み重ねとなった。韓国で韓国を研究することで得られたさまざまな財産は、研究を通じて「過去」をめぐる日韓間のわだかまりを解きほぐし、心の通った日韓関係の構築に貢献することで、社会に還元していきたい。



佐藤 雪絵

早稲田大学大学院政治学研究科博士課程在学中
専門は韓国政治思想史、韓米関係史、移行期正義研究。主な著作に、「韓国MZ世代とフェミニズム運動：オンラインからオフラインへの拡大と深化する政治的対立」(『コリアン・スタディーズ』第11号、2023年)、「米軍政期南朝鮮における人権概念の導入：ロジャー・N. ボールドウィンの活動に着目して」(『現代韓国朝鮮研究』第19号、2019年)など。

助成事業紹介

2024年度に実施された6つの事業を紹介します。(助成対象事業一覧は本号24～25ページの「実績報告」をご覧ください)

在韓日本人女性施設ナザレ園のハルモニたちを記憶する写真展

(鹿児島韓国研究会 5月31日～6月5日)

2018年5月に結成された鹿児島韓国研究会は、鹿児島と韓国・朝鮮に関する歴史を中心に学ぶ講演会、「韓国の新聞を読む会」を定期的に行うほか、韓国の文化を鹿児島市民に紹介する活動も行っています。

今回、日韓ともに国内でほとんど知られていない慶州ナザレ園居住の日本人ハルモニたちの存在を歴史的に記憶する作業の一環として、写真家金鐘旭（キム・ジョンウク）氏が20年間とり続けた写真を公開する写真展を開催しました。あわせてナザレ園のハルモニたちが存在することになった歴史的背景を「内鮮結婚」研究の第一人者である韓国・朝鮮大学の李正善（イ・ジョンソン）教授に、ナザレ園の沿革やそこでのハルモニたちの生活の具体的な様子などを金鐘旭氏に講演いただきました。展示会会場では金鐘旭氏、さらにはナザレ園を支えた多くの韓国の人々への感謝を示す来場者の姿もあり、ハルモニたちの人生をめぐる韓国・日本人の交流のエピソードが日韓交流の原点としてもつ意味を来場者の皆さんに感じていただける機会となりました。



展示会場での写真家金鐘旭氏による講演

パワーアッププロジェクト ～交流・体験・発信～ 琵琶湖編

(TANAKAMI子ども環境クラブ 7月19日～22日)

琵琶湖の保全活動を通じた青少年の環境教育に取り組む地元グループと、韓国で水田や湖沼環境の保全とその教育活動に取り組む市民ネットワークが交流しています。2024年1月は日本側が韓国・仁川を訪問し、干潟や湿地の保全状況について学びましたが、今回は韓国側を地元・滋賀県に招いて琵琶湖の環境保全について紹介しました。

中学生から大学生までの幅広い年齢層の参加者による活動で、事前のオンラインでの交流と学習を重ねた後、両国のメンバーが現場を訪れて学習した内容について理解を深めると同時に、メンバー間の親睦も図りました。また今回は期間中、琵琶湖畔で行われた地域イベントにて、韓国側メンバーが来場者と交流するブースの運営や、活動成果のプレゼンテーションにも取り組みました。

こうした幼少期からの経験が、環境保全への意識向上と将来のリーダーの育成につながるよう、今後も活動がさらに発展していくことを期待しています。



水生植物の実を使ったアクセサリー作りのワークショップの様子

青少年日韓音楽交流会 in 大邱

(SPIELRAUM 7月26日～29日)

韓国・大邱市所在の青少年アンサンブルと岡山県所在の青少年アンサンブルによる交流を目的とする音楽会が、前年の岡山での第1回に続き、2024年は岡山のチームが大邱を訪問し、また大邱所在の日本人グループも参加して、盛大に開催されました。

参加した子供たちは一年ぶりの再会を喜び、また今回初めて参加した子供たちもすぐに打ち解けて仲良くなっていました。今年は小編成の日韓コラボアンサンブル演奏も試みられ、子供たちは合同演奏とは違う緊張感の中、仲間を思いやりながら演奏する大切さを学んだようです。

この他にも交流会を通じて、参加した両国の青少年たちはますます親睦を深めました。次回は再び日本での開催が予定されています。



日韓コラボアンサンブル演奏の様子

北東アジア学生ラウンドテーブル2024

(北東アジア学生ラウンドテーブル 8月4日～13日)

国際教養大学の学生団体「北東アジア学生ラウンドテーブル (STUDENT ROUND TABLE)」は、「各国学生間の相互理解を達成すること」「活動の成果を地域社会に発信し、地域の国際化に寄与すること」「団体の交流ネットワークを維持・拡大すること」の3つを活動目的として、2008年から毎年1回北東アジア各国地域の学生を集め、国際会議を企画運営してきました。

5年ぶりの日本（秋田県）開催となった今回は、日本・韓国・台湾の学生計32名が10日間の行事に参加。「新しい社会問題に対する若者の基本的な取り組み方と心構えを探る」というテーマの下、3つの分科会にわかれて議論を行ったほか、秋田県内でのスタディツアーなども実施し、メンバー同士の交流を深めました。

北東アジア諸国が抱える問題について、各国の将来を担う学生の視点から熱い議論を交わし、また、日本、特に秋田の魅力を各国地域の参加者にアピールすることができました。今後、次回の韓国開催に向けて準備を進めていく予定です。



議論を終えて記念撮影

第39回日韓学生会議 夏季東京交流大会

(第39回日韓学生会議 8月7日～16日)

インターカレッジの国際交流学生団体である、日韓学生会議。両国の学生による率直かつ建設的な対話の場を提供することで相互理解と友好増進、ひいては世界平和に寄与するという理念のもと、1985年秋に誕生しました。大学生の日韓交流団体のパイオニアとして、その活動は1986年の第1回会議から39年間、途切れることなく現在に至っています。

活動の中心は、国内で開く週1回の定例会と、メインイベントである韓国側の韓日学生会議との「夏季交流大会」です。

今回のテーマは「私たちの夏、共に歩む街角」。少子化問題、若者の政治参加、若年層の自殺要因、両国における「レトロブーム」、方言の文化という5つのイシューについて、分科会ごとに議論を行い、その成果をシンポジウムで報告しました。また、分科会別のエクスカッションも行い、10日間の濃密な時間を過ごすことで、韓国側メンバーとの友情を深めました。現在は節目の第40回会議（韓国開催）に向け、新体制で準備が進められています。



39回メンバー全員で記念撮影

令和6年度日韓青少年対話型交流事業

(令和6年度日韓青少年対話型交流事業委員会 8月19日～22日)

筑波大学の学生たちが中心となって立案された本事業は、令和5年度はオンラインのみでの実施でしたが、今回はオンラインでの事前事後研修に加え、対面形式でのプログラムが実現しました。

日韓の大学生を対象とした探求型国際交流プログラムとして、韓国で選抜された学生を日本に招へいし、日本の学生と3泊4日の合宿形式で「教育や地域の格差」、「高齢化問題」など日韓共通の課題解決のためのアイデアを導き出すことを目指し、関連機関の関係者による特別講演などを通じて学びを深めました。

最終発表では、各グループで設定した課題とその解決のための具体的なアイデアを発表しました。グループ活動を通じて、日韓の学生たちは互いの文化や考え方についても理解しあうことができたようです。

この事業は今後も引き続き開催される予定であり、さらに深化したプログラムが実施されることを期待しています。



最終発表の様子

事業報告

2024年1月以降の事業について報告します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	属性	人数	期間	テーマ・訪問地・訪問校
2023年度 韓国青年訪日団 (第4～5団)	大学生	67	2024 1/9～17	日本の少子高齢化対策と地方再生事例 (東京都、青森県) 法政大学、目白大学、青森中央学院大学
韓国青年訪日団 (第6団)	高校生	30	2/13～21	日本各地のSDGsへの取り組み～鹿児島県・熊本県の実例 (東京都、鹿児島県、熊本県、福岡県) 鹿児島情報高等学校
韓国青年訪日団 (第7～8団)	大学生 高校生	64	2/20～28	日韓共通の課題を探る～防災、SDGs、少子高齢化を中心に、 日本各地のSDGsの取り組み (高知県の事例) (東京都、宮城県、大阪府、和歌山県、高知県) 東北大学、高知県立中村高等学校
2024年度 日韓学術文化交流事業訪日団 (第1～2団)	社会人	61	6/11～19	日本の教育現場視察 (東京都、神奈川県、北海道、山梨県、 長野県、愛知県) 川崎市立平間小学校、七飯町立大沼岳陽学校、 北海道教育大学、東京都立三鷹中等教育学校、飯田市立遠山中学校、 愛知教育大学
韓国大学生訪日団 (第1～2団)	大学生	90	6/25～7/3	日本の平和への取り組みと日韓交流 (東京都、埼玉県、千葉県、 広島県、大阪府、奈良県) 神田外語大学、獨協大学、広島修道大学、 安田女子大学
韓国ジャパンリポーター訪日団 (第1団)	大学生 社会人	37	7/9～17	日本の地域活性化対策 (宮城と大阪の事例) (東京都、埼玉県、 宮城県、大阪府) 石巻専修大学
韓国青年訪日団 (第1～2団)	高校生	61	7/24～8/1	日本各地のSDGsの取り組み～新潟県の事例 (農業を中心に) (東京都、新潟県)、新潟県立津南中等教育学校
韓国高校生訪日団 (第1～2団)	高校生	100	9/22～28	日韓交流とSDGs (東京都、埼玉県、長野県、岐阜県、愛知県、 大阪府、奈良県、和歌山県) 長野県白馬高等学校、和歌山県立 星林高等学校
韓国高校生訪日団 (第3団)	高校生	50	9/22～28	先端技術を専攻する高校生交流 (ロボット工学学習者編) (東京都、 鹿児島県、福岡県) 鹿児島情報高等学校
在韓日本大使館公報文化院リ ポーター訪日団	大学生 社会人	10	9/27～10/3	「日韓交流おまつり in Tokyo」参加及び日本の地域再生事例視 察 (東京都、富山県、岐阜県、愛知県)
外務省外交部相互派遣大学生 訪日団	大学生	30	11/6～11/14	日韓国交正常化60周年へ向けて～未来を夢見る相互交流～ (東京都、 沖縄県) 法政大学、沖縄国際大学
韓国ジャパンリポーター訪日団 (第2～5団)	大学生 社会人	121	2025 1/14～22	能登半島地震から1年、北陸の現状視察 (岐阜県、石川県、福 井県、愛知県)
韓国ニューリーダー訪日団	大学生	30	2/4～12	日韓国交正常化60周年、今後の日韓交流へ向けて (東京都、 広島県、香川県、岡山県)
韓国青年訪日団 (第3～4団)	高校生	66	2/11～19	日韓交流と日本の神話と伝説のふるさとを巡る (熊本県、宮崎 県)
韓国青年訪日団 (第5団)	高校生	35	2/11～19	日韓交流と日本の平和教育 (福岡県、熊本県、長崎県、佐賀県)

* 2025年2月以降は予定事業を含む。

訪韓団

団体名	属性	人数	期間	テーマ・訪問地・訪問校
2023年度大学生訪韓団(第1～2団)	大学生	50	2024 3/10～16	日韓交流と韓国の現状理解(ソウル特別市、京畿道、慶尚北道慶州市、釜山広域市ほか) 東国大学
2024年度日韓学術文化交流事業訪韓団	社会人	49	8/18～24	韓国の教育、歴史及び文化全般に対する理解(ソウル特別市、京畿道) ソウル吉元初等学校、培花女子高等学校、漢陽大学
外務省外交部相互派遣大学生訪韓団	大学生	30	9/20～28	日韓国交正常化60周年へ向けて～未来を夢見る相互交流～(ソウル特別市、京畿道、江原特別自治道) ソウル大学
高校生訪韓団(第1～2団)	高校生	100	11/3～9	日韓交流と韓国の現状理解(ソウル特別市、京畿道) 韓国観光高等学校、韓国アニメーション高等学校、突馬高等学校、東国大学校
高校生訪韓団(第3団)	高校生	50	11/3～9	先端技術を専攻する高校生交流(ロボット工学学習者編)(ソウル特別市、京畿道) 水原ハイテク高等学校、ソウルロボット高等学校
大学生訪韓団(第1～2団)	大学生	90	2025 3/9～15	日韓交流と韓国の現状理解(ソウル特別市、京畿道、釜山広域市)

* 2025年2月以降は予定事業を含む。

② フェローシップ・助成事業

① 2024年度訪日・訪韓フェローシップ採用者

2024年度訪日・訪韓研究支援(フェローシップ)には1次・2次募集を合わせて35名(訪日25名、訪韓10名)の応募があり、審査の結果、20名(訪日17名、訪韓3名)を採用しました。

訪韓(1次募集)

氏名・所属	研究テーマ
キム・ソニア 大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター 研究員	在韓在外同胞教育における「社会化」に関する教育社会学研究ー在日コリアン母国修学制度を中心に
佐藤雪絵 早稲田大学大学院政治学研究科 博士課程	1980年代韓国女性運動における「過去清算」の政治思想史：対米認識の変容に着目して
山下慶 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科 特任助教	現代韓国の教育における軍事文化とその涵養ー高校教育を中心にー

訪日(1次募集)

氏名・所属	研究テーマ
呉允禎 ソウル大学人文大学アジア言語文明学部 助教授	今和次郎の考現学における「非文字表現」の方法論的意義
金知原 東京大学大学院総合文化研究科 博士後期課程	日本の植民地帝国大学をめぐる「同床異夢」
李尚祐 神戸大学大学院国際協力研究科 博士後期課程	グローバルな都市地域づくり：なぜ日系資本は、韓国の国際都市に集まったのか？ ー韓国における仁川経済自由区域の松島国際都市と日本における京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区 ・関西イノベーション国際戦略総合特区の神戸医療産業都市地区を中心にー
河棕文 韓信大学 日本学科 教授	文化財と韓日関係

金文子 祥明大学歴史コンテンツ学科 教授	秀吉の文書と壬辰戦争
張恩恵 韓国文化財庁国立慶州文化財研究所 学芸研究士 / 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究 博士 課程後期	東北アジアにおける新石器文化の形成過程
趙眞九 慶南大学極東問題研究所 助教授・日本研究センター長	韓日安保協力研究
金仙熙 建国大学アジアコンテンツ研究所 前任研究員	「境界」地域における地域活性化研究－歴史・文化遺産の現在的活用 と関連して
申知瑛 延世大学文科大学 副教授	在日朝鮮人集住地区における女性と動物 ― 人／種主義からはみだし たアジア流民のポストメモリー
金炫石 釜山デジタル大学教養学部 非常勤講師	日系新宗教における日・韓の宗教と社会の変容と現在－創価学会と 天理教を中心に－

(2次募集)

氏名・所属	研究テーマ
金志英 漢陽大学日本学科 副教授	日本の防衛産業と政策の進化：地域安全保障への影響と日韓防衛産 業協力の可能性についての分析
鄭美娟 国立中央博物館 学芸研究士	近世やまと絵と贈朝屏風
全鎮浩 光云大学国際学部 教授	日本と韓国の核潜在力の比較と原子力協力
辛貞和 東西大学日本研究センター 所長	日本・韓国・北朝鮮関係の変遷と特徴
金漢正 前 韓国国会議員	北東アジア平和増進のための日米韓協力方案
朴泰圭 嘉泉大学アジア文化研究所 責任研究員	日本の舞楽研究－高麗楽「崑崙八仙」の源泉探求を中心に
李京在 崇実大学人文大学国語国文学科 教授	1970年代前半における韓日文学の交流の様相に関する研究：「朝鮮 文学の会」を中心に

② 2024年度人物交流助成対象事業

2024年度人物交流助成には 1 次・2 次募集を合わせて75件の申請があり、この中から31件に対し助成を行いました。

(1次募集)

事業名	申請団体
在韓日本人女性施設ナザレ園のハルモニたちを記憶する写真展	鹿兒島韓国研究会
パワーアッププロジェクト ～交流・体験・発信～ 琵琶湖編 TANAKAMIこども環境クラブ	TANAKAMIこども環境クラブ
日韓和太鼓交流	福岡和の祭典実行委員会
青少年日韓音楽交流会	SPIELRAUM
北東アジア学生ラウンドテーブル2024	北東アジア学生ラウンドテーブル

第39回日韓学生会議夏季東京交流大会	第39回日韓学生会議
日韓ユース文化交流事業	一般社団法人SGSG
日韓中学生ホームステイ交流	水南国際交流委員会
令和6年度日韓青少年対話型交流事業	令和6年度日韓青少年対話型交流事業委員会
日韓シンポジウム「台所の歴史—近・現代」	家具道具室内史学会
日韓藝術通信 Vol.9 「カッカプコ モルダ モルゴ カッカプダ 近くて遠い、遠くて近い」	日韓藝術通信実行委員会
ガラス造形による日韓交流プロジェクト	ガラス造形国際交流会
「日韓交流おまつり2024 in Seoul」 米良美一 派遣事業	合同会社ラ・メーラ
「日韓交流おまつり2024 in Seoul」 孝藤右近 派遣事業	株式会社Cool Japan Entertainment
九州韓国研究者フォーラム日韓学術交流	九州韓国研究者フォーラム
マダン：民衆が共集する広場	マダン劇プロジェクト実行委員会
宗像CSR日韓環境国際交流	宗像CSR推進実行委員会
共通の課題解決のための日韓大学生セミナー2024	日韓大学生セミナー実行委員会
日韓歴史教育者交流シンポジウム	歴史教育者協議会日韓交流委員会

(2次募集)

事業名	申請団体
日本韓国現代作家交流事業2024 —アーティスト・イン・レジデンス及び展覧会—	一般社団法人IKUHART企画
日韓舞台芸術交流プログラム—対話—	一般社団法人MMST
茨城県立竹園高校トンシン科学高校相互交流	茨城県立竹園高等学校
第30回稲尾杯日韓親善障がい者ソフトボール大会並びに稲尾和久氏17回忌追悼セレモニー	NPO法人日韓障がい者交流協会ふくおか
対馬の歴史と文化と自然を知る日韓ユース・ワークショップ2024	朝鮮文化財ワークショップ実行委員会
美しい韓国書芸の世界—仙台展 ～書道を通じて世界と触れ合おう～	東北日韓友好交流連合会 (TOFA)
2024年度 (第35回) 獨協インターナショナル・フォーラム	獨協大学国際教養学部
第2回 子どもの眼で世界を観る実践探求	特定非営利活動法人日本セラプレイ協会
日韓学生会議	日本国際学生協会
チャレンジ「韓国の子どもの心をつかむ劇を届けよう!」	中部大学劇団くれよん
2024 静岡・釜山新朝鮮通信使友好事業	一般財団法人静岡市国際交流協会
第12回東アジア音楽祭2025inヒロシマ ＜ヒロシマからのメッセージ “日本と韓国の友好と創造の祭典”＞	一般社団法人ヒロシマ・ミュージック・プロジェクト

③ 2024年度学術定期刊行物助成

- 韓国朝鮮の文化と社会 第23号 (韓国・朝鮮文化研究会編、2024.10)
- 現代韓国朝鮮研究 第24号 (現代韓国朝鮮学会編、2024.11)

3 日韓文化交流基金賛助会員制度

公益財団法人日韓文化交流基金では賛助会員制度を設けており、現在も多くの皆さまからご支援を賜っています。心より感謝申し上げます。

賛助会員の皆さまからいただいた会費は、助成事業などを通じて日韓間の文化交流に活用しています。制度については当基金ウェブサイトにてご案内していますので、ご関心をお寄せくださいますと幸いです。

賛助会員リスト

(2024年有効会員、五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数)

特別会員 (5名)

鹿取克章(3) 古賀信行(3) 中江新(3)
馬定延(3) 渡辺浩(3)

個人会員 (43名)

青野正明 阿部孝哉 安部誠 飯島渉 磯崎典世
稲葉真岐子 林在圭
内田富夫(2) 大竹洋子 小野正昭(2)
菅野修一 姜英淑 木畑洋一 小林直人 小針進
高麗文康 坂井俊樹 阪田恭代 酒勾康裕
櫻井浩 佐藤俊行 上保敏 白川豊 塚本壮一

陽清学園津谷正毅 都恩珍 永井哲 西澤豊
波田野節子 墨の美術館濱崎道子
日本民藝館理事長深澤直人 福原裕二 藤田昭造
藤本幸夫 堀泰三 前田二生 松井貞夫(2)
實生泰介 向修一 茂木敏夫 吉岡雅子
余田幸夫 和田とも美

法人会員 (1団体)

和光物産株式会社(5)

4 第37回日韓文化交流基金 代表訪韓団

当基金の古賀信行会長をはじめ、理事・評議員から構成される代表訪韓団が、10月1日から3日までの日程で韓国を訪問しました。韓国の要人及び関係する各機関の方々と、日韓国交正常化60周年を見据えた今後の交流の進め方などについて活発に意見交換を行いました。



韓国外交部趙兌烈（チョ・テヨル）長官（右）と懇談する古賀会長（左）

5 理事会・評議員会・役員人事

① 2024年（以下同じ）3月22日に第101回理事会が開催され、2024（令和6）年度予算案が承認されました。

② 6月24日の令和6年度定時評議員会にて、令和5年度の決算が承認されました。

また同評議員会にて、以下の人事が承認されました。

就任／評議員：柄 博子（東京外国語大学監事）

⑥ 「日韓交流おまつり in Seoul」 及び 「日韓交流おまつり in Tokyo」 でのブース出展

2024年9月22日にソウル・COEX Dホールで開催された「日韓交流おまつり in Seoul」において、当基金が派遣した大学生訪韓団員たちが「折り染め体験」と「災害が起こった際の被災者の知恵紹介」の2つのプログラムを通して、来場者の方々に日本について知ってもらう活動に取り組みました。折り染め体験では、和紙に絵の具で自分の好きな模様をつける等の手作業を経て、ブックカバー等に使用できるオリジナルグッズを作ってもらいました。また、「被災者の知恵紹介」では、日本で起こりうる自然災害について説明し、災害に遭遇した際の対処法や、身近にあるもので作れる防災に役立つアイテムの製作体験もしていただきました。いずれのプログラムも大盛況で、幅広い年齢層の方々が楽しんでくださいました。



また、9月28～29日の2日間にわたり、東京・駒沢オリンピック公園で開催された「日韓交流おまつり in Tokyo」において、当基金は『韓国の若者と語ろう』ならびに『高句麗古代装束試着体験』のブース運営を行いました。29日はあいにくの雨模様でしたが、両日合わせて約750名の方がブースを訪れ、文化体験を楽しんでくださいました。

〔協力〕 高麗神社、一般社団法人高麗1300、JKAF (Japan Korea Alumni Forum)

※本号16ページに「日韓交流おまつり in Tokyo」においてブース運営を担った大学生訪韓団OBOG組織 (JKAF) メンバーによる活動報告を掲載しています。

WEBサイトリニューアルについて

当基金WEBサイトを2025年3月にリニューアルいたします。

新たなデザインと利便性のアップを図ることで、これまで以上にわかりやすく、当基金の活動や最新の情報をお伝えいたします。



広報誌発行回数の変更について

今号より、年1回の年間事業報告として発行することとなりました。

最新の情報はホームページ及び、Facebook、Instagram、X (旧Twitter) でお伝えするとともに、引き続き誌面の充実につとめてまいります。



公益財団法人 日韓文化交流基金

〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 プライム水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 fax. 03-6261-6780



Web



Facebook



X



Instagram